

中島敦

中島 敦

△叢書 現代作家の世界 5V

昭和五十二年四月一日発行

編 者 鷺 只 雄

発行者 谷 地 秀 祐

印刷所 (財)大蔵省印刷局朝陽会
製本所 株式会社三高製本

発行所 文泉堂出版株式会社

住 所 東京都千代田区神田神保町二―一四―六
電 話 東京(03)二六五局八九八一番(代表)

(落丁・乱丁本はお取替いたします)

中

島

敦

目 次

1 人と文学

中島敦入門

瀬沼茂樹 八

中島敦——人と作品

氷上英廣 一四

中島敦、その世界の見取図

福永武彦 三三

2 作家論・作品論

中島敦論

中村光夫 三六

中島敦の文学

白井吉見 三九

中島敦の狼疾について

武田泰淳 四三

中島敦氏のこと

渡辺一夫 五〇

群峰に卓立する格調

中野好夫 五七

中島敦の魅力

高木 卓 三

中島敦について

野間 宏 四

中島敦の文学

西 義之 五

運命と人間——中島敦論

高橋 英夫 七

空想と言葉との織物——中島敦論

饗庭 孝男 二六

*

中島敦君の作品

深田 久弥 一三

「李陵」と「弟子」と

手塚 富雄 一四

「弟子」をめぐって

篠田 一士 一四

中島敦論

荒 正人 一五

伝奇と歴史小説

山本 健吉 一八

ケチくさくない作品

開 高 健 一六

中島敦の短歌について

太田 一郎 二〇

3 回 想

「ト ン」

土方 久 功 二〇六

敦のこと

釘 本 久 春 二〇九

ハンスとフランツ

宗 隆 二一七

中島敦のこと

氷 上 英 廣 二二三

＊

中島敦における時間と空間

鷺 只 雄 二四一

年 譜

二四九

参考文献

二五三

人
と
文
学

中島敦入門

瀬 沼 茂 樹

中島敦は、明治四十二年五月五日、端午の節句に東京市四谷区篁笥町五九番地に生まれた。父は中島田人、当時、三十六歳、千葉県の組合立銚子中学校の漢文科の教師であり、母は岡崎氏千代子、小学教員であつた。

中島氏は尾張国造、中津郡領主の裔といわれ、中島清右衛門（天香）が慶長四年徳川氏に随つて江戸に下り、代々清右衛門を称して、神田乗物町を領した。十四代中島撫山（慶太郎）は亀田綾瀬の門に入り、漢学を修めた漢学者で埼玉県久喜町に住い、『性説疏義』『演孔堂詩文』の著がある。父中島田人は撫山の六男で（明治七・五・五生）、埼玉県江面村の私立明倫館をふりだしに、東京神田の私立錦城中学、千葉県銚子中学と、漢文教師をつとめた。長兄十五代緯軒（靖）は栃木に漢学塾をひらき、次兄斗南（端）もまた漢学者で、『斗南存藁』があり、放浪の生涯を送つた。中島氏は漢学者の一家であり、三男竦（おひげの伯父）は王振善隣書院の中国語教師であつて、また教育家の一家でもあつた。敦が特に漢学の素養において深かつたことはこの家の精神的伝統に負うところが大きい。

中島は不幸にして数え年二歳の時に、生母千代子を父に離別され、久喜町の父方の祖父母のもとにひきとられて、養育された。しかも祖父撫山は明治四十四年六月二十四日死去し、専ら祖母キクの手

によつて育てられた。大正五年、小学入学にあたつて、父の任地奈良県郡山におもむいたが、父は前々年に後妻紺家カツを納れていた。不幸なことに、この継母との仲も、香しいものではなかった。父の転任にともない、静岡県浜松、朝鮮京城と小学を三たびかえた。大正十一年四月、京城中学に入つた。湯浅克衛、小山政憲と同級であつた。翌大正十二年三月、妹澄子が生まれると、継母カツと死別した。父は翌十三年、第三の母飯尾コウをむかえたが、この継母との折合もおもしろくはなかつた。継母は大正十五年一月二十日、敬、敏、睦子の三児を生んだが、敬、敏の二弟は相次いで年内に死んだ。他方、この年四月、中島は中学を四年間首席で通し、四年修了で、数え年十八歳で、第一高等学校文科甲類に三番で入学し、不快な家庭生活から脱することができた。後の習作『プールの傍で』のなかで、この時代の両親への反撥を回想ふうに描いてある。

昭和二年春、湿性肋膜炎にかゝり、入院して一カ年休学しなければならなかつた。この夏、静養のために、伊豆の下田に赴いて、しばらく滞在し、『下田の女』を書き、一高の『校友会雑誌』(昭和二・一一)に投じた。今日みられる最初の習作である。十九歳の少年の習作としては、温泉宿の女を表裏両面から描いて才気があり、当然比較される川端康成の伊豆ものに似て感覚的であり、格調の正しい唯美的な文体をみせている。つづいて、同じ療養生活から取材した『ある生活』および『喧嘩』を『校友会雑誌』(昭和三・一一)にかゝげた。前者は結核患者の愛の挿話であり、考え方によつては父の任地であつた大連の見聞がおりこまれているし、後者は漁師の一家の出来事であり、共に明るい感覚的な描写のなかに、暗い病気の陰影がさしている。このころから、宿痾の喘息の発作がみられるようになったという。

昭和四年二月、立沢剛の部長のもとに、氷上英広らとともに、文芸部委員となつた。そして『藤・竹・老人』『巡查の居る風景』（昭和四・六『短篇二つ』『D市七月叙景(1)』（昭和五・一）を『校友会雑誌』に発表した。下田への旅の途中で知つた赤いチョッキに、空色の頭巾の老農夫の生涯の不幸の話、遡つて大正震災後、朝鮮における朝鮮人巡查に関連する中学時代の思い出、或いは大連における植民地風景の断面図といった社会的関心のある題材がとりあげられている。しかも中島は、特異な題材をこなしながら、昭和初期の新感覚派からきたモダニズム文学の影響をうけ、横光利一ふうの文体をとりいれていることが観取される。中島は氷上、釘本久春、吉田精一と同人雑誌『しむぼしおん』を出したけれども、これには何も書かなかつた。小父田人は大連二中の教職を昭和四年末に退いて東京に帰り、やがて世田谷区世田谷町十ノ十二四に住んだ。

昭和五年四月、東京大学文学部国文科に入学した。大学に入ると、ダンスに熱中し、麻雀に凝り、伊庭孝の経営していた芝赤門麻雀クラブに出入した。彼もまた昭和初年のアメリカエズムの風潮にひたつて、そんな形で、大学生活の余暇を享樂することをおぼえたとみえる。六月末日、孤独放浪の生活を送りながら、甥のうちで、秀才の彼を愛していた伯父の漢学者中島斗南が胃癌のために、目黒洗足の山本開蔵（撫山の五男、後海軍造船船中将）の家で亡くなつた。彼に感慨の深いものがあつたことは、後の『斗南先生』でわかる。このころ、彼は英国大使館付駐在武官海軍少佐W・サッチャーに日本語を教えていたことは、級友の釘本久春の思い出に語る逸話によつて知られる（『北方行』参照）。

翌六年三月には、橋本たかと結婚した。その後、翌年夏、旅順に叔父中島比多吉（撫山の七男、関東庁外事課長）を訪ね、満洲や中国に旅行した。それらは國漢にすぐれた彼の教養や見聞をやしなう上

で大いには役だつたであらう。

昭和八年三月、『耽美派の研究』（四二〇枚）を卒業論文として提出して、東京大学をおえた。一高を卒業するころまでに、荷風、潤一郎の作品をほど読みあげていたというが、この論文は鷗外・敏の系統をたどり、白秋にふれながら、荷風と潤一郎とを論じたものであり、自然派の日本文学における貢献をみとめる一方、浪漫的的精神を蹂躪したことを遺憾とし、白樺派が思想的に、人生的にこれに反対したに對し、耽美派はなによりも芸術的に拮抗したものとし、「感覚の美の発見」において、新しい美の種類を加えたと結論した。これは中島敦の精神傾向の出身を語る評論であり、このころ書かれたと推定されている『プウルの傍で』にみえる孤独・絶望・自嘲・自虐などの諸性向とともに、その文学の耽美的な出発をあかすものであつた。

大学を卒業すると、なお大学院に席をおいて、耽美派の系統を鷗外に遡つて、その研究を深める考えであつた。同時に、私立横浜高等女学校に国語と英語との教鞭をとることになり、單身、横浜市中央区長者町アパートに住つた。妻は実家の愛知県碧海郡依佐美村高棚新地にあつて、四月二十八日、長男桓をもうけた。まもなく妻子は上京してきて、目黒の緑ヶ丘に住んだ。大学院の方は一年でやめたけれども、横浜高女の教職には昭和十六年六月までつとめ、その作品の大部分はこの時代に書かれた。

『中央公論』昭和九年一月号は島中雄作社長の「宣言」をのせ、「汎ゆる方面に新入出でよ」と、論文、中間物、創作の原稿募集をおこなつた。中島敦はこれに応じて『虎狩』を投じたが、七月十五日発行の「臨時増刊新人号」では選外佳作十篇のうちに入つたとどまる。これは作者の朝鮮時代の

思い出に取材したものであり、同級生の趙大煥との関係において、自己の存在をふくめて、人間存在の得体のわからぬものを暗示し、作者の志向を早くもしめしたものである。前年から英訳本でカフカを愛読し、或いは南方熊楠を読み、民俗的な説話に内面的な意義を感じるまでに漸く内面生活が深まってきたことである。こうはいつても、文章こそ年齢に比しすぐれているが、後年の完成度からいえば遠く及ばず、器用にまとめた感じがする。いいかえると、二十六歳の青年の若い野望であつた。

しかし『虎狩』が選外佳作になつたことは、文学に或種の自信をもたせたにちがいない。カフカに次いで、ガアネットの『狐になつた奥様』などの変身譚を愛したほか、アナトオル・フランスを読み、ロオレンス、ハックスリを翻訳し、列子、莊子、韓非子のような中国古典、高青邱、王維の漢詩に傾倒し、東方の古代文明をしらべたりした。そして、『狼疾記』『かめれおん日記』のような身辺に取材した生活記録を昭和十一年末に脱稿し、未完成の『北方行』を昭和十二年ごろ書きあげ、或いは自己嫌惡に陥つた自我の救済をめがけて『悟浄歎異』を昭和十四年初に脱稿し、ステイヴンソンの晩年のサモア諸島における生活によせて、喘息に悩む自画像をきざみこんだ『光と風と夢』、また「詩人になりそこなつて虎になつた哀れな男」をかたる『山月記』、また『悟浄出世』を昭和十六年初めまでに書きあげた。一高の先輩である深田久弥の手に、『光と風と夢』その他が托された。

中島は、その間、昭和十一年三月、横浜市中区本郷町三ノ二四七（通称ガス山）に一家をかまえて、妻子と共に住んだ。まもなく四月二十五日に継母コウの死を送り、彼もまた翌昭和十二年一月十三日、長女正子を生まれてすぐ失つた。その三年後の昭和十五年一月二十八日次男格が生まれた。持病の喘息に苦んでいた中島は、熱帯の氣候がこの苦痛から免れられるのではないかと思案して、昭和

十六年三月末、横浜高女をやめ、パラオ南洋庁国語教科書編集書記となつて南洋に出張したが、パラオでデング熱にかゝり、太平洋戦争をむかえて緊張した訓練に身心を破り、昭和十七年三月十七日に帰京した。

出張中に『山月記』『文字禍』の二篇は『古譚』として『文学界』（昭和一七・二）にかゝげられた。次いで『光と風と夢』も同誌の五月号にのつた。この二作は戦時の文学の荒廢のなかで注目をひき、反響が高く、第十五回芥川賞の予選にのぼり、石塚友二の『松風』とともに議せられた。室生犀星が「秀作」として推し、川端康成が石塚に次ぐものとしたほか、積極的に推すものがなかった。予選委員の滝井孝作が『光と風と夢』を「反訳か何かに似た達者な粗らい文体」といい、『古譚』に「術学的なくさ味」を認めて好まず、同じ宇野浩二が前者を「荒削りの作品」、後者を「細工があり過ぎる」とみて、候補作品にいれなかったからである。結局、「該当作無し」となつた。選者たちが作者の内心の劇を、その反訳体や術学体の奥に読みとり、そこにこのブリリアントな才能を認めるだけの用意がなかったというだけである。彼はこの決定に作家として立つ決意をかため、川端の忠告どおり「精進の鞭」とし、九月、南洋庁を辞した。

第一創作集『光と風と夢』（『虎狩』『山月記』『文字禍』『狐憑』『木乃伊』『斗南先生』を含む）がこの年七月、筑摩書房から、第二創作集『南島譚』（『幸福』『夫婦』『鶏』『環礁』『かめれおん日記』『狼疾記』『悟浄出世』『悟浄歎異』『牛人』『盈虚』）が同年十一月、今日の問題社から刊行された。この二冊はそれまでに書きあげていた未発表の作品をふくめて、一種の清算をこゝろみ、作家生活への出発の用意とするものであつたろう。惜しいことには、南洋でかゝつた熱病、帰京後の肺炎、そして秋

になると起る烈しい喘息の発作のために心臓が衰弱し、十一月中旬入院、昭和十七年十二月四日、数え年三十四歳で、短い生涯をとじた。

彼が作家として立つ決意をかため、着々と仕事をすゝめていたことは、死後に発表されることになった『弟子』（昭和一八・二・中央公論）や『李陵』（同・七・文学界）のような名作によつて、一種の余韻をひいていることからわかる。中島敦は、宿痼の喘息から宿命的な厭世主義を用意し、自己を問いつめて、複雑な精神構造をもち、これを中国古典や、南洋への夢や、また自己の生活記録に転位し、芸術家的な彫琢をへて、小説世界に構築する才腕をもつていた。もし戦後にひきつづいて自在な活躍をさせたならば、田畑修一郎の場合よりも、暗い戦争時代を純粹な詩魂と強靱な精神とをもつて、くどりぬけようとしていただけに、期待するところも大きかつたと、愛惜の念にたえないものがある。

（『日本現代文学全集』第八二卷・昭和39・10講談社）

中島 敦——人と作品

氷 上 英 廣

1

中島敦の作品は数多くありません。さきに昭和二十三年の秋から翌年の春にかけて筑摩書房から「中島敦全集」三巻が刊行され、それに対して毎日出版文化賞が与えられましたが、かれの作品のほ

とんど全部がそれに収録されております。しかもその第三巻は、未定稿や一高時代に校友会雑誌に書いたもの、歌稿などを集めておりますから、まず彼の作品として独立しうるものは、だいたい最初の二巻に尽きているということができるでしょう。今度の現代教養文庫の選集は、それらのものを全部含んでおりますし、かつかれの特色ある歌も収められていますから、選集といっても中島敦のほとんどすべての作品を尽くしているということができましよう。(上記のもの以外におよそ中島敦の書いたもので現在残っているものは、かれの東大国文科の卒業論文「耽美派の研究」、それからハックスリーの「パスカル」の翻訳、さらに書簡若干などがある筈です。詮索すればなおいくつものものがこれに加わると思いますが、こうしたものもなんらかのかたちで纏められることを、私は望んでおります)。

かれは昭和十七年十二月四日に三十三歳で病歿しました。このような若さで倒れなかったならば、かれの作品はもっと沢山になったことでしょう。立派な仕事が続々と発表されたに違いありません。またかれがもっと早く文壇に認められて、作家的自覚をもって仕事をしたら、作品の量は現在あるよりはずっと増えていたろうと思います。なにしろかれの作品が文壇にあらわれたのは、昭和十七年二月号の「文学界」に載った『古譚』(『山月記』などを含むもの)がはじめてであり、つづいて五月号に『光と風と夢』が載ったかと思うと、はやくも同じ年の十二月には、いま申したように、この世の人ではなかったのですから。(翌年二月号の「中央公論」が『弟子』を、七月号の「文学界」が『李陵』を遺作として載せております)。かれは孤独な作家でありました。かつていずれの同人雑誌の同人でもありませんでした。文壇の大家の指導も受けず、そのような交友もありませんでした。ひとり考